

# 近世版本に描かれた仏壇と位牌

## 仮名草子を中心に

Buddhist Altars and Memorial Tablets Depicted in Early Modern Edition :  
Focusing on Kana Zoshi

徳野崇行

TOKUNO Takayuki

はじめに

①「仏壇」をめぐる語彙と学説史

② 仮名草子に描かれた仏壇

おわりに

### 【論文要旨】

本論は死者や先祖を祀る仏壇の歴史的展開について、17世紀に刊行された仮名草子の挿絵をもとに分析するものである。近世版本には多くの挿絵があり、その中には当時の慣習や文化を描いたものも少なくない。19世紀に刊行された山東京伝の合巻には自宅の環境に応じた様々な形態の仏壇が確認できるものの、日本において仏壇がいつどのような形で普及していったか、とくに寛文年間以降に成立した寺請制度の影響を想定しつつ検討する必要がある。

まず仏壇研究の意義を明確化するため、「仏壇」の語彙について『日葡辞書』などから検討する。そして柳田國男、平山敏治郎、竹田聰洲らによって進められた民俗学の仏壇研究が起源論的な性格をもち、仏教以前の祖先崇拜を示す魂棚や先祖棚、平安貴族や武士などにみられる持仏堂から仏壇へと変化していったとする歴史観をもつものに対して、大河直躬や森隆男による仏壇研究は近世から現代にかけての歴史的展開を焦点化している点について触れる。

仮名草子の挿絵の分析では、近世後期の合巻に比して明らかに位牌や仏壇を描いた挿絵が少ない状況があることを確認した上で、『仮名本朝孝子伝』『本朝二十四孝』といった孝子伝で父母の象徴として位牌が描かれていること、『狂歌咄』には「仏壇」の文言が確認できる日蓮名号が飾られた挿絵があること、『二人比丘尼』『うすゆき物語』にみられる仏画が飾られた祭壇、『為愚癡物語』の念仏をする光景などを描いた挿絵などに触れ、17世紀の仏壇の具体的な実態について報告する。

【キーワード】 仏壇、仮名草子、供養、寺請制度